core
Vol. 45
March 2016

語り直される回心への旅路
――C. S. ルイス作『顔を持つまで』と『喜びのおとずれ』の類似性――

野田ゆり子

序

作家、キリスト教擁護者、大学教授など様々な肩書きと共に活躍したC. S. ルイス（C. S. Lewis, 1898-1963）は、人生の大半をオックスフォード大学で過ごした。初めは詩人として大成することを望んでいたルイスだったが、多くの教養人たちと交流する中でジャンルやテクニック、テーマを模索した結果、彼の創作スタイルは長きに渡って少しずつ変化していった。晩年に出版された『顔を持つまで』（*Till We Have Faces*[1]［1956］）は、そうしたルイスの作家人生の集大成と言っても過言ではない。『顔を持つまで』は、アープレーイュスによって書かれた『黄金の驢馬』の挿話としても有名なクピドー（Cupid）とプシュケー（Psyche）の神話を、プシュケーの姉オリュアル（Orual）の視点から語り直したものである。一般的に知られる物語とは異なり、「姉のオリュアルは妹プシュケーを愛していた」ということを前提としたこの作品は、神に対する告発文から成る第一部と、回心の告白書である第二部で構成されている。全編においてほぼ一貫してオリュアルの一人称で語られるが、これは自叙伝を除いてそれまでのルイスの作品には見られなかった特徴である。『顔を持つまで』が、聖書的なテーマをSFというジャンルを通して描いた『別世界物語』（*Space Trilogy*［1938-45］）や、子ども向

けのファンタジー作品『ナルニア国ものがたり』(*The Chronicles of Narnia* [1950-1956]) などとは一線を画す作品だったことのみならず、その語りのテクニックもルイスの小説としては新しい試みだったことは明白である。

『顔を持つまで』は、ほぼ同時期に出版された自叙伝『喜びのおとずれ』(*Surprised by Joy*[2] [1955]) と語りに類似性を見出すことが可能である。『喜びのおとずれ』は、ルイスの幼少時代からキリスト教に回心するまでの姿を綴ったものであり、小説である『顔を持つまで』と関連性の薄い作品のようにも思われる。しかし、ピーター・J・シャケル (Peter J. Schakel) は、『顔を持つまで』を論じることに全編を費やした数少ない研究書の一冊である *Reason and Imagination in C. S. Lewis* の中で、この二作品の具体的な語りの類似点として、「回想 ("retrospect")」、「主体性 ("subjectivity")」、「選択性 ("selectivity")」などのキーワードを挙げており、『喜びのおとずれ』の語りの手法が『顔を持つまで』にいかに影響を与えたかについて論じている。

> The subjectivity and selectivity in *Surprised by Joy* seem to have opened the way for Lewis to write *Till We Have Faces*, his next book. . . . [Lewis] had been unable to find the right "form" for it [the story of Cupid and Psyche.] Now the right form comes to him, and it is no coincidence that it is fictional autobiography. . . . Orual's account of her life, like Lewis's account of his own in *Surprised by Joy*, is retrospective, subjective and selective. It is striking, then, that suddenly he is able to complete successfully two stories he had long sought to tell but had been unable to: his own story and that of Cupid and Psyche. (160)

シャケルは、『喜びのおとずれ』の語りの手法が、ルイスが語り直そうとし

ていたクピドーとプシュケーの物語を完成させる上で非常に重要だったことを示している。つまり、語り手が自ら人生を語り直すという共通点を持ったこの二作品は、ジャンルの違いを超えて深く関連し合っているということが理解できる。

この二作品を比較する時、これらの語りのテクニックの類似性に加えて、クライマックスの類似性についても言及する必要がある。オリュアルが神の前に自身の過ちを認めるという場面と、ルイスが神を認めて祈るという場面は、両作品を分析する上で無視することが出来ない類似点だと考えられる。こうした類似性から、ルイスの自叙伝は『顔を持つまで』の土台を構築しているということ、すなわち、両者の関連性の模索は、『顔を持つまで』の語り手の自叙伝的側面、上のシャケルの言葉を借りるとすれば、「小説的自伝」(“fictional autobiography”) としての側面を検証する上で非常に有用性が高いと考えられる。

なお、語り手であるオリュアルとルイスの類似性に関しては、シャケル、ハンフリー・カーペンター、リーン・ペインらがすでに論じている。カーペンターはオリュアルをルイスの自画像 (“self-portrait”) であるとしており (Carpenter 245)、ペインは、『顔を持つまで』におけるオリュアルの物語は、ルイスの物語であると同時に普遍性を有していると表現している (Payne 58)。しかし、これらは作家ルイスとオリュアルの比較を行った先行研究である。本論ではルイスの伝記的事項ではなく、あくまでも『喜びのおとずれ』で語られている事柄のみを扱うことを前提に、両作品の比較分析を進める。

第1部と第2部では、先行研究であるシャケルの論を基に、両作品の類似

点を検討する。第1部では語りの主体性と選択性の観点から両作品の類似性を考察し、いかにこの二つの作品が語り手によって主体的に選ばれた過去のみで綴られているのかについて述べる。第2部では回想とその信頼性について、両作品の語り手の語る立場を明確にした上で、彼らの現在の視点がどのように介入し、語りの信頼性を揺るがしているのかという点について取り上げる。第3部では、神に対する恐れ、避けられない神の接近、語り手たちの意志の喪失といった類似点から成るクライマックスを考察する。本論の目的は、自叙伝である『喜びのおとずれ』がいかに『顔を持つまで』に影響を与えているかについて論じることにある。

1. 主体性（“Subjectivity”）と選択性（“Selectivity”）

ルイスは、『喜びのおとずれ』の序文で、この自叙伝を「息が詰まる程主体的（“suffocatingly subjective”; viii）」であるとしている。語り手ルイスは、読者あるいは聞き手を強く意識しているため、伝記では当然のように触れられている事柄について一切語られていないことも少なくない。[3] その一方で、語りの目的である「回心の記録」を逸脱して長々と語られる箇所もある。与えられる情報が語り手によって意図的に操作されている可能性を、読者が加味して作品を読解しなければならないという点については、作品における語り手の介入が著しい、『顔を持つまで』においても同じことが言えるだろう。そのため、この二作品を比較するためには、語り手の主観が介入し、語りの目的に合わせてあえて選択されている場面と選択されなかった場面を検証することが不可欠なのである。

『喜びのおとずれ』において、語り手による過去の主体的な選択は顕著に

行われている。まず、ルイスが意図的に口を閉ざしている箇所の例としてシャケルが挙げているのは、ルイスがノルマンディーで過ごした日々についてである。

> It will be clear that at this time – at the age of six, seven, and eight – I was living almost entirely in my imagination; or at least that the imaginative experience of those years now seems to me more important than anything else. Thus I pass over a holiday in Normandy (of which, nevertheless, I retain very clear memories) as a thing of no account; if it could be cut out of my past I should still be almost exactly the man I am. (*SbJ* 15)

『喜びのおとずれ』は、彼が無神論者を経てキリスト教に回心するまでの軌跡を綴ったものであり、その結末に至るまでの道程で重要視されているのが、幼少期の想像力や「喜び」の体験であるため、この自叙伝を書く目的に沿わない箇所はあえて省略されている（Schakel 153）。すなわち、ノルマンディーでルイスがどのように過ごしたのかは意図的に省かれているが、こうして省略された部分は、自らの人格を形成する上で不必要な過去なのだとここではっきりと表明しているのである。

では反対に、彼の人格を形成するために大きな役割を果たした過去について、語り手はどのように表現しているのだろうか。ここで例に挙げられるのは、ハートフォードの学校、ウィニヤード校（Wynyard School）での劣悪な環境である。この学校を強制収容所の名前から取ってベルゼン（Belsen）と表現している程、ここで過ごした日々はルイスにとって忘れてしまいたい記憶である。しかし、同時に語り手は長々と校長である爺さん（Oldie）の残

酷さについて語っており、最終的に "I must restrain myself. I could continue to describe Oldie for many pages; some of the worst is unsaid" (29) とあるように、自らを律しなければ延々とこの話題について語り続けてしまうとさえ言っている。この過去は、客観的に彼の語りの目的を踏まえると、重要だとは言えない (Schakel 154)。しかし、自らの人格を形成する上で大きな影響を与えた記憶であるからこそ、忘れたいものであるにも関わらず、彼はこのことについて語らずにはいられないのである。また、この学校での記憶は、ルイスと父親の確執を語るために必要な要素でもある。ルイスの父親は、ルイスと彼の兄が学校でいかに酷い目に遭っていても特に気に掛けることはなかった。語り手ルイスは、父親の姿を滑稽に描写した上で "My father must not bear the blame for our wasted and miserable years at Oldie's" (31) としている。これについて、シャケルは次のように表現している。

> Lewis says much in *Surprised by Joy* about his difficulties with his father, but he by no means says it all – the antipathies ran very deep. . . . Lewis might well be using the chapter to express, perhaps unintentionally, some of the bitterness the experience, and the lack of awareness on his father's part, engendered in him. (Schakel 154)

ルイスの父親に対する嫌悪感は、直接的に描かれなくとも彼の心にしっかりと根ざしていることを読み取ることが出来る。学校と校長を批判する章を通して、ルイスは暗に父親との不仲を示しているのである。

『喜びのおとずれ』が、主体的に選択された過去を組み合わせた作品であることに疑問の余地はないだろう。ある過去については完全に切り捨て、ある過去については主観を交えて語るという手法は、『顔を持つまで』にも用

いられている。オリュアルは、自分自身が気付かないうちに自分の内面の変化を赤裸々に綴っている。オリュアルのプシュケーに対する愛が憎悪へと変貌する様子や、オリュアルが感じていた自身の醜さのコンプレックス、そして全ての元凶となった異教の神への反抗心など、語り手の内面が次々と変化していく様は、彼女が主体的に選択した過去である。一方で、彼女が切り捨てた過去として、彼女が女王になってから成し遂げた偉業の数々が挙げられる。オリュアルの語る内容の殆どが、女王になる前にプシュケーとの間に起こった出来事であり、彼女の女王としての手腕や国の統治に関する事柄については、語り手の口からは詳しく語られることはない。むしろオリュアルは、以下の引用部にあるように、自分の女王としての手腕は過大評価されていたとさえ述べている。

> It may happen that someone who reads this book will have heard tales and songs about my reign and my wars and great deeds. Let him be sure that most of it is false, for I know already that the common talk, and especially in neighbouring lands, has doubled and trebled the truth, and my deeds, such as they were, have been mixed up with those of some great fighting queen who lived longer ago and (I think) further north, and a fine patchwork of wonders and impossibilities made out of both. (*TWHF* 226-27)

「彼女が女王として成し得たことは、一人歩きした評判ほどのものではない」というオリュアルの言葉を、読者はどこまで信用出来るのだろうか。『喜びのおとずれ』で語られなかった内容は、伝記や残された文献からの補完が可能だが、『顔を持つまで』はフィクションであり、読者は作品で語られてい

る内容以上の事柄について追求出来ない。そのため、彼女が賢明な女王だったか否かを客観的視点から知るためには、祭司アルノム（Arnom）をはじめとする次のような他者の意見に注目する必要がある。*"This book was all written by Queen Orual of Glome, who was the most wise, just, valiant, fortunate and merciful of all the princes known in our parts of the world"*（*TWHF* 308）．これは、第二部のオリュアルの告白文の最後に、アルノムが付け足した箇所に当たる。[4] シャケルが、"The story of her life would look quite different if Arnom had written it: his postscript to the book indicates that he would have begun differently, emphasized different details, aimed at a quite different goal"（Schakel 67）と表現している通り、オリュアルの人生がもしもアルノムの視点で描かれていたら、おそらく彼は彼女の女王としての手腕が引き立つ出来事を書き連ねていたはずである。だが、『喜びのおとずれ』において、ノルマンディーで過ごした日々のことが切り取られていたのと同様、オリュアルの女王としての偉業が殆ど語られていないのは、それが今現在の語り手、すなわち告発文を書いている現在の彼女を構築している要素として不必要であると語り手によって断定されたためである。なお、上記のオリュアルの言葉は第一部より引用したものであるため、ここでの語りの目的は「神への告発」であるという点が『喜びのおとずれ』の語りの目的である「回心の記録」と異なっていることに留意しておく必要があるが、ある目的のために必要な部分だけを取り上げ、不必要な部分を削ぎ落としているという点は、二つの作品の類似性を明らかに示している。

2. 回想（“Retrospect”）と語りの信頼性

『喜びのおとずれ』と『顔を持つまで』の明らかな共通点は、語り手がある時点から過去を回想しているという点、それを再び自らの言葉で語り直しているという点である。同時に、回想される内容に「現在」の語り手の思考が入り込むことで、内容が信頼性に欠けるという点も類似していると言えるだろう。

まず、この語り手たちがどのような「現在」から自分自身を振り返っているのかを整理する。『喜びのおとずれ』において、語り手ルイスは回心した後にかつての自分を語り直すという形を取っている。ただし、このテキストの中からは、これ以上詳しい情報は読み取れない。[5] 一方、『顔を持つまで』では、どの時点から語り手が語っているのかを明確に定義付けることが出来る。第一部においては、オリュアルが女王として長く統治した後、エシュールの司祭（the Priest of Essur）から聞いた話をきっかけに、神に対する告発文を書こうと決心した時点から語られている。第二部は、オリュアルが回心を遂げた四日後、自分の間違いを正そうとしている時点から語られる。それぞれの冒頭から、オリュアルの立場が第一部と第二部で明らかに異なっているということが見て取れる。まず、第一部の冒頭部分を引用する。

> I am old now and have not much to fear from the anger of gods. . . .
>
> Being, for all these reasons, free from fear, I will write in this book what no one who has happiness would dare to write. I will accuse gods, especially the god who lives on the Grey Mountain. That is, I will tell all he has done to me from the very beginning, as if I were making complaint of him before a judge. (*TWHF* 3)

読者が注目しなければならない情報はここに集約されている。特に、オリュアルが "I am old now" と言っていることが肝要である。何故なら、シャケルが "The narrator is old 'now,' a signal that the story operates at different levels, or different stages in time" (Schakel 9) としているように、「現在」とは違った時間軸で物語が展開することが示唆されているためである。この時点では、オリュアルは神に対する怒りの感情を隠さず、神が自分の敵であるという立場を譲るつもりがないことが見て取れる。一方で、第二部の冒頭では次のように記されている。

> Not many days have passed since I wrote those words *no answer*, but I must unroll my book again. It would be better to rewrite it from the beginning, but I think there's no time for that. . . . Since I cannot mend the book, I must add to it. To leave it as it was would be to die perjured; I know so much more than I did about the woman who wrote it. What began the change was the very writing itself. (*TWHF* 253)

年老いたオリュアルには、神への告発文である第一部を書き直す程の体力はない。しかし、その後に起こった決定的な出来事によって価値観が百八十度変わったことを、彼女は最後の力を振り絞って記録する。第二部のオリュアルの立場は、第一部の時と大きく異なり、「回心した後」つまり『喜びのおとずれ』の語り手ルイスと同じ立場にいるのである。読者はこの二つの冒頭部分から、オリュアルが第一部と第二部においてそれぞれ別の立場から語っていることに留意して読み進めなければならない。このように、語りの目的こそ『顔を持つまで』の第一部のみ異なるものの、ある時点からの回想であるという点では、『喜びのおとずれ』と『顔を持つまで』の第一部と第二部

の双方が完全に一致している。

また、過去を回想して語り直す時、現在の語り手の立場が介入してしまうことで信頼性が損なわれるという点においても両者は類似している。『喜びのおとずれ』の語りの信頼性が疑わしいように思える理由に、この自叙伝の特徴として、あえて現在形で書かれた箇所が散見されることが挙げられるだろう。下記の引用は、第二章の冒頭部分である。

> Clop-clop-clop-clop. . . we are in a four-wheeler rattling over the uneven squaresets of the Belfast streets through the damp twilight of a September evening, 1908; my father, my brother, and I. I am going to school for the first time. We are in low spirits. (*SbJ* 22)

ここでは、薄暗い夕べ、ベルファストの街を四輪馬車で駆け抜けていくという場面が、詩的に表現されている。シャケルはこの箇所について次のように述べている。"The present-tense description of his first departure for school in a four-wheeler is surely a reconstruction, a telling of what it must have been like rather than exactly what it was" (Schakel 152). 現在形で過去を語り直して「再構築 (reconstruction)」することは、重点を語りの正確性ではなく詩的な表現に置くことに等しい。すなわち、ルイスは『喜びのおとずれ』においてこうした表現をあえて用いることによって、作品の小説的な価値を高めようとしたのである。[6]

一方、『顔を持つまで』においては、ほぼ一貫して過去形が用いられており、オリュアルが自分の記憶している内容に忠実であろうとする態度が見受けられる。また、作家ルイスは意図的に "utterly nonsubjective" だとシャケルが論じる、エシュールの司祭を第一部の終盤に登場させ、『顔を持つまで』

の基にしたアープレーイュスの綴った物語により近い話をさせることで、オリュアルの主体的な語りと対立させている。この客観的な語りを置くことによって『顔を持つまで』が三人称で展開する小説以上に信頼性のあるものに昇華されているということがシャケルによって論じられている（Schakel 68)。

だが同時に、このように客観的視点から捉えられた物語が語られることによって、オリュアルの語りが相対的に信頼性を欠く箇所が見受けられる。例えば、彼女がプシュケーに会った後、早朝に川の水を飲んで顔を上げた時、昨晩には見えなかったはずの宮殿を垣間見たのではないかと感じる場面がある。オリュアルは、なるべく当時の印象を事実に近い状態で書こうとしているが、それが本当に目の錯覚ではなく実際に見たのかどうかという判断は、"And now, you who read, give judgement"（*TWHF* 133）とあるように、一切読者に委ねられている。オリュアル自身は宮殿を見たのかどうか判断出来ず、司祭の言葉を聞いて告発文を書いている時でさえその判断を放棄しているのである。彼女が判断を放棄した理由として、この場面で起きた出来事が「神への告発」という語りの目的に反していることが挙げられる。つまり、オリュアルは実際にその宮殿を見たけれども、それを見たと認めてしまうと、自分が神にいかに不当に扱われているのかを綴っている告発文が成り立たなくなってしまうため、彼女は「一瞬でも宮殿を見た」と語ることが出来ないのである。シャケルは、不確かな彼女の語りと対立する司祭の語りは、「オリュアルは宮殿を見ていた」という、彼女にとって不都合な事実をほのめかしていると指摘している（Schakel 68)。つまり、あえて小説的側面に重点を置いた『喜びのおとずれ』の語り手ルイスと同様に、オリュアルもまたこの場面で語りの目的意識を自身の過去に反映させているのである。

このように、正確性よりも表現に重点を置いた『喜びのおとずれ』と、語られていない過去を読者に明らかにすることで語り手の回心を劇的に描き出した『顔を持つまで』は、両者とも「現在」の語り手の立場を反映した過去を繋ぎ合わせることで完成されているのである。

3. クライマックスの比較分析

両作品の語りのテクニックの類似性については前述の通りであるが、場面の類似性から内容自体に視野を広げることも可能であると考えられる。『喜びのおとずれ』と『顔を持つまで』において内容的に最も類似しているのは、二人の語り手たちが辿った道程に差異はあるものの、彼らが最終的に行きつくのは「回心」であり、二人が神の方に心を向けるという場面で両作品がクライマックスを迎えるということである。この二つのクライマックスでは、語り手たちが神を恐れているという点、自分たちが神に近づくというよりも神が自分たちに近づいてきているという点、神の存在を前に語り手たちは意志を持つことが出来なくなっているという点が類似していると言えるだろう。

最初に、『喜びのおとずれ』のクライマックスの場面を挙げる。

> You must picture me alone in that room in Magdalen, night after night, feeling, whenever my mind lifted even for a second from my work, the steady, unrelenting approach of Him whom I so earnestly desired not to meet. That which I greatly feared had at last come upon me. In the Trinity Term of 1929 I gave in, and admitted that God was God, and knelt and prayed: perhaps, that night, the most dejected and reluctant convert

in all England. (*SbJ* 228-29)

ルイスは、モードリン学寮（Magdalen）の個室にいる時に、邂逅したくないと思っていた神が近づいてくるのを感じ、最終的には神を認め、跪いて祈る。自分自身のことを「イングランド中で最もしぶしぶ回心した者（“the most dejected and reluctant convert in all England”）」（228-29）と表現しているため、回心は彼が心から望んでいたものではなかったということが分かる。

『顔を持つまで』におけるクライマックスでは、まずオリュアルが女神となったプシュケーに出会う。そして、プシュケーによってオリュアルは神のもとに導かれる。

> The earth and stars and sun, all that was or will be, existed for his sake. And he was coming. The most dreadful, the most beautiful, the only dread and beauty there is, was coming. The pillars on the far side of the pool flushed with his approach. . . .
>
> I looked up then, and it's strange that I dared. (*TWHF* 307-08)

オリュアルは自分の人生の最後に、全ての事象は神のために造られたものであることを悟る。常に神に敵対していたオリュアルが、ようやく自分自身の身勝手さに目を向けて神を受け入れるという場面は、『顔を持つまで』という小説の全てを総括する場面であるとも言えるだろう。

まず、最初の類似点として、ルイスもオリュアルも神を恐れているという点を引用部分から検証する。『喜びのおとずれ』では、神は “That which I greatly feared” と描写され、『顔を持つまで』でも “the most dreadful” と表現されている。オリュアルは、顔を上げて神を真正面から見ようとした自分の勇気を不思議だと感じる、とさえ言っている。これらの描写から、二人が神に

背を向けて生きてきた理由の一つは、神に対する潜在的な恐れだったことが推測されるだろう。

また、クライマックスの類似点として更に加えられるべきは、語り手たちが神に向かって歩むのではなく、逆に「神が彼らに向かって歩いてこられた」という点である。『喜びのおとずれ』では、上で引用したように "the steady, unrelenting approach of Him" と表現されており、『顔を持つまで』でも、"his approach" や、"The most dreadful, the most beautiful, the only dread and beauty there is, was coming" などと描写されている。語り手たちの意志に関係なく、神は彼らに自ら歩み寄ってくる存在として描かれているのである。

このような状況下で、語り手たちはただ神に心を向けること以外何も出来ない。つまり、神を前にして二人の「意志（will）」が意味を持たなくなったという点にも二人の語り手に共通性が見られる。『顔を持つまで』では、きつね（the Fox）がオリュアルの手を引き、プシュケーの元に連れて行くが、この時の「私に意志は全くなくなってしまったように思う（"I think I had no will in me at all"）」（*TWHF* 305）というオリュアルの言葉が示す通り、彼女は自分自身の意志を神との邂逅を前に持つことが出来ない。『喜びのおとずれ』においても同じく、神が近づいたと感じた時に語り手ルイスはついに拒むのをやめている。「屈服した（"I gave in"）」（228）という表現からも、自分の意志とは裏腹に神の前に跪かなければならなかったという語り手の状況を読み取ることができる。よって、両作品においてオリュアルとルイスの旅のゴールは、神の前に意志を一擲することにあったのだと仮定できる。語り手二人の回心の根本にあるのは、自分自身をはじめとする全てのものは神のためにあったという気付きである。すなわち、かつては神に面と向かうこ

とが出来なかったオリュアルとルイスは、近づいてくる絶対的な存在に対して恐れを抱くが、自分自身を神の被造物の一つとして捉えることで、神に対する反抗の意志を完全に捨て去っているのである。[7] ルイスがしぶしぶ回心したのに対し、オリュアルは全てを受け入れられる状態で回心を遂げたという点から、二人の語り手に心理状況における若干の差異が見受けられるものの、クライマックスのこのような類似は、『顔を持つまで』と『喜びのおとずれ』の新たな共通点の一つとして確実に提示できるように思われる。

4. 結び

本稿では、シャケルの示した『喜びのおとずれ』と『顔を持つまで』の語りのテクニックの類似性を比較した上で、それ以外の共通性をクライマックスに見出すことが出来るかという観点から考察を行った。その結果として、主体性、選択性、回想といった語りのテクニックの類似性だけでなく、内容自体に踏み込んで二者の類似性を示すことが出来た。

『顔を持つまで』はルイスの最後の小説に当たるが、彼がプシュケーとクピドーの神話を姉の視点から語り直すという着想を得たのは、大学時代であったとされている。当初はこの物語を詩で書こうとしていたルイスだったが、最終的には一人称小説という形式を用いることで作品を完成に導いた。しかし、『顔を持つまで』は彼が最も愛した作品とされているにも関わらず、『ナルニア国ものがたり』や『別世界物語』などをはじめとする小説家として彼のファン、あるいはキリスト教擁護者としてのルイスのファンの心を掴むことは出来なかったとされている（フーパー　187)。『顔を持つまで』は彼の死後再評価されたものの、SF 三部作やファンタジーシリーズと比較す

ると、作品の完成度にも関わらずその知名度が圧倒的に低いことは否めない。しかしながら、ルイス自らが序文で「(このような作品は) 今まで書いたことがなく、もう二度と書くことはないであろう」("the kind of thing I have never written before and shall probably never write again." : viii) と述べている『喜びのおとずれ』と『顔を持つまで』に類似性を見出せることは、『顔を持つまで』がC. S. ルイス研究においていかに重要な作品であるかを示唆しているものと思われる。

『顔を持つまで』は、語りの手法が自叙伝を除いたそれまでの小説と異なっているという点のみならず、アープレーイュスの著した物語との相違点、ルイスのキリスト教擁護者としての考え方が反映されている点、オリュアルを取り巻くキャラクターたちが象徴するものなど様々なテーマを孕み、多角的な論考を可能にする作品である。今後、『顔を持つまで』を更に新たな観点から論じることで、ルイス研究に新しい光を投げかけることを目指していきたい。

註

1. 以下註においては *TWHF* として記す。
2. 以下註においては *SbJ* として記す。
3. 自叙伝『喜びのおとずれ』において、ルイスによって意図的に省かれている部分は数多く見受けられるが、その最も顕著な例として、戦死した友人パディ・ムーア (Paddy Moore) の母親であるジェイニー・ムーア (Janie Moore) との関係について全く言及されていない点が挙げられるだろう。ウィルソンは、ルイスが『喜びのおとずれ』の中で "But before I say anything of my life there I must warn the reader that one huge and complex episode will be omitted" (198) と記した部分こそ

がルイスとジェイニー・ムーアに関連する事柄だと断定している（Wilson 58）。この部分は、ルイスが意識的に選択を避けている部分の一つであると言える。

4. 作品の大部分がオリュアルの視点から語られているため、このように他者の意見が挿入されている部分は非常に少ない。そのため、アルノムのこの言葉は、女王オリュアルを取り巻く状況、あるいはグロームという国の客観的事実を知るための大きな手がかりと言える。
5. 『喜びのおとずれ』が書かれたのは1955年頃であるが、これはテキストの外の情報である。本稿ではあくまでもテキストのみに重点を当てて検証するため、語り手ルイスがどの「現在」から語っているのかという具体的な断定は控える。
6. 詩的あるいは小説的表現を重視し、あえて現在形を用いるという特徴は、『顔を持つまで』の回想部分には殆ど見られない。
7. 彼らが自らを神の被造物であると認めて意志を捨て去ったことについては、作家であるルイス自身のキリスト教擁護者としての考え方が反映されていると考えられる。引用部でオリュアルは "The earth and stars and sun, all that was or will be, existed for his sake"（*TWHF* 307）としていたが、晩年の宗教著作集のうちの一冊である『四つの愛』（*The Four Loves* [1960]）においても、ルイスは「私たちは神のために創造されたものである（"We were made for God"）」（158）と表現している。

参考文献

Carpenter, Humphrey. *The Inklings: C. S. Lewis, J.R.R. Tolkien, Charles Williams and Their Friends.* London: Allen and Unwin, 1978. Print.

Lewis, C. S. *The Four Loves.* London: Geoffrey Bles, 1960. Print.

---. *Surprised by Joy.* 1955. Boston: Mariner Books, 1966. Print.

---. *Till We Have Faces.* 1956. Boston: Mariner Books, 2012. Print.

Payne, Leanne. *Real Presence: The Holy Spirit in the Works of C. S. Lewis.* Grand Rapids (MI): Barker Books, 1995. Print.

Schakel, Peter. J. *Reason and Imagination in C. S. Lewis.* Grand Rapids (MI): William B. Eerdmans, 1984. Print.

Wilson, A. N. C. S. *Lewis: a Biography.* 1990. London: Harper Perennial, 2005. Print.

アープレーイュス『黄金の驟馬』、呉茂一他訳、東京：岩波書店、2013年。

川口喬一、岡本靖正編『最新 文学批評用語辞典』東京：研究社、1998年。

フーパー、ウォルター『C. S. ルイス文学案内事典』、山形和美監訳、東京：彩流社、1998年。